指導主事だより

なんだか　うれしい

教育委員会

相談時間等　月・水・金曜日
●立科小学校／午前9時～午前11時30分
電話 56－3131（呼）・有線2190（呼）
●立科中学校／午後２時～午後５時
電話 56－1076（呼）・有線2251（呼）
●立科町児童館／
午前 11時50分～午後１時40分
電話 56－0303(直通)・有線 8888（直通）
（担当　指導主事　中島一彦）

無着成恭と山びこ学校の子どもたち

今から六十数年前、山形県山元中学校43名の学級で発行され続けた「機関車」という学級文集がありました。1年間に15冊発行され、日本全国で大きな話題を呼ぶようになりました。「機関車」はやがて「やまびこ学校」というタイトルで一冊の本として出版されていきます。

文中、卒業式で3年生、佐藤藤三郎君が答辞として語る場面があります。その一節を紹介します。

私たちが習ったことは、人間の生命というものは、素晴らしく大事なものだということでした。そして素晴らしく大事な生命も、生きていく態度を間違えば、さっぱり値打ちのないものだということを習ったのです。「みんなの中には、自分の悪さを他人になすりつけるような馬鹿者はいないはずだ」と言って無着先生は笑いました。私たちの骨の中心までしみ込んだ言葉は、

○いつも力を合わせていこう・・ということでした。
○働くことが一番好きになろう・・ということでした。
○いつでも“もっといい方法はないか探せ”ということでした。

いよいよ卒業です。「自分の脳みそ」を信じ、「自分の脳みそ」で判断しなければならなくなります。しかし私たちはやります。私たちはやっぱり人間を信じ、村を信じ・・・。（後略）

「山びこ学校　無着成恭　著　岩波文庫」参照

無着成恭逝く

貧しい山村の生活を自分の問題として捉え、どうすればもっと良い暮らしができるのか、貧しさから抜け出せるのかを、子どもたちが考え続けていました。子どもたちのすごさを目の当たりにした感動がありました。こんな豊かな育ちを生み出すには、どうしたらいいのか。子どもたちと豊かさでつながっていきたい・・・そんな気概を与えられた一冊の本との出会いでもありました。しかし子どもと出会った若き自分はまったく感覚が違っていました。子どもは教師の言うことを聞くものであり、その指示に従うべきものだという感覚が染みついた悪しき教員でした。様々な場で感情的に叱責している教員でもありました。しかし、出会いを重ねていく中で、信州や日本の教育を切り開いた多くの先達が存在し、その教育実践を学ぶとき、そこに共通してみられるものがありました。それは教え導くことを先行させなかったという確固たる教育理念です。今、目の前の子どもたちに苦悩があり、悲哀があれば、まずそれに心を寄せ、共に在ろうとした事実です。勉強が本物か、偽物かなど、考えたこともありませんでした。勉強が「生命の大切さ」と、その大切な生命の「生きていく態度」に向かっていくべきものというような筋道も、まったく持てませんでした。

ここに挙げられた作文一つ一つには、生活者としての姿勢が確かであり、感受性の鋭さが伝わります。どの子も、例外なくひとり一人が深く生きているという事実が、教師の中に座っていなければならない・・・そんな思いをかきたてられ続けてきました。自分もまた未熟な人間のひとりだという自覚が深まりました。

子どもたちのこまやかな世界までも画一的に見てしまうという過ちを、繰り返すまい・・・そんな思いを無着先生の訃報に接し問い直しています。

社会人としての資格を得るためにではなく、人間として自立を果たすために学校は必要な場であるはずです。

教師が完成された人間として子どもの前に立ちはだかり、未熟な人間のひながたとしての子どもを教え導くという一方的で固定された関係ではなく、子どもも教師も共に学び合わなくてはならない自己変革を必要としている人間だという視点が大切だと思っています。

一人の人間が信じられないほど多くの人々の心の中に生き、その人を生かし、その人の人生を深めたという、そういう人間の大きな可能性が読書の中にはあります。そして日々の教育実践の中にもあります。「いのちは、愛おしく、限りなく深く、人と人との交わりの中で育てられていく」・・・無着成恭の声を聞きながら、立科町の先生方と学び続けていきたいと思っています。